

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一

 問1 から

四

 問4 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから10ページまであります。
- 5 検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認^{かくにん}しなさい。
- 6 解答用紙は二枚^{まい}あります。
- 7 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 8 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。）

鳥専門のペットショップで売られていたタカを買っても
らった中学生の理央は、そのタカをモコと名付けて育て始
めた。理央は、鷹匠（タカに狩りをさせるために、飼育、
訓練をする人）を目指し、モコを高く飛ばしたいと願って
いるが、うまくいかずに思いなやんでいた。次の文章は、
女子高生は鷹匠と新聞に取り上げられていた平橋さん
を訪ねた場面である。

「じゃあ、一回目、行きます」

平橋さんがそう言うと、腕に乗った花太郎は、言葉を理解し
たように、首を前に数回小さくつきだした。そして、笛の合図
とともに飛び立った。花ちゃんが飛ぶのを実際に見るのは二回
目だが、今日はさらに攻撃的だ。

「気合十分って感じ」

「さつき、首を前につきだしたでしょ。あれは、今から敵を襲
うっていうサインなんよ」

「へえ」

その意気ごみどおり、花太郎はカラスに一直線につつこんで
いった。

「カーカーカー」

とたんに上空にはカラスの鳴き声がひびきわたった。

「すごっ」

どこからこんなに集まってきたのかと思うほどのカラスの大
群が、空をおおう。

「花ちゃん」

理央は心配になった。いくら訓練を受けているといっても、
たった一羽でこの大群に勝てるだろうか。

しかし花太郎はさらに高度を上げると、果敢にも、もう一度
つつこんでいった。ひるむ素振りも迷いも見せない。風をつき
やぶる矢のようだ。

カラスはそんな花太郎のまわりで、あっちに行ったりこっち
に來たり、あわてふためいた様子だ。さつき平橋さんが言っ
ていた、モビングという行動だろうが、理央の目には、ただパ
ニックになっているようにしか見えなかった。

そのうち、花太郎の飛び方が変わってきた。特定のカラスに
ばかり向かっている。明らかに一羽にねらいをつけたようだ。
けれどその後は、あまり深追いもせず電柱に止まった。

花ちゃん、疲れたんかな。

理央が思ったとたん、花太郎はぱつと飛び立った。相手の不意をつくタイミングだった。そして一気に加速し、猛スピードでねらいを定めたカラスに襲いかかった。敵を油断させて出し抜いたのだ。ねらわれたカラスは命からがら逃げていく。

「カーカーカー」

それを見たほかのカラスが、我先にと逃げはじめた。あつというまに、上空からカラスはかき消えた。

①「すごい」

理央は肩で息をついた。花太郎の行動はまさに狩りをする動物の迫力そのものだった。持ち得る観察力や瞬発力、持久力。その能力のすべてを、獲物をとるというただ一点に、集中させて炸裂させる。大いなるエネルギーの源を見たような気がした。カラスを追いはらったあとの花太郎は、勝ち取った空を、まるで悠々と散歩でもするように飛んでいた。だれに遠慮することもなく、空を独り占めにしている。翼を立てて、なめらかにのびやかに飛んでいる。

「帆翔……」

理央は空をあおいでつぶやいた。

「よく知つとるね」

平橋さんも空を見あげた。

「前にペットショップの店長さんから教われました。本当にヨットが帆を立てて、海にこぎ出してるみたい」

タカはまっすぐに翼を広げたまま、空を飛んでいる。ときどき体を傾けると、翼は天に向かって伸び、まさに帆船のマス
トみたいに見える。

②まるで大海原を進むような、花太郎。体が傾くたびに、すうっと高度があがる。帆が風の力を借りて進むように、翼で風を受けているのだ。

「気持ちよさそう」

途中までは人と同じ進化を遂げながら、神から空を飛ぶことを許された動物、鳥。

花太郎はゆったりと全身を風にあずけている。あるがままの姿だ。見ているこちらまでも、ゆったりとした気分になる。あれにくらべればモコの飛翔など、磯遊びみたいなものだ。

モコのことを思い出し、ついふきだしそうになっていると、平橋さんは言った。

「すごく楽々と飛んでいるように見えるでしょう。でも、あれ、意外に細かい技術が必要なんよ」

「細かい技術？」

「尾羽^{おばね}をよく見てみて。少しずつ左右に傾けて、微妙^{びみょう}なバランスをとつとるのがわかるよ」

「えっ、そうなんですか」

理央は、すべるように風に乗る花太郎の尾羽に目を凝^こらしてみた。

「あ、ほんとう」

確かに両翼^{りょうよく}は広げたままだが、尾羽のほうは、かじを切るように左右に傾けている。

「軽くやってのけているように見えても、その裏^{うら}には、繊細^{せんさい}な技術が必要なんよね」

平橋さんの言葉は、すかんと開いた空にしなりとしみこんでいくようだった。

しばらくして平橋さんは笛^{ふえ}を吹き、花太郎を戻^{もど}した。

「おつかれさま」

*
ヒヨコをついばむ花太郎に、ねぎらいの言葉をかける。

花太郎の行動をモコはどう見ていたのだろうか。花太郎が飛んでいるあいだ、理央の腕に止まっていたモコは、上空の雄姿^{ゆうし}にさして関心は持っていないようだった。

「モコちゃんもやってみる?」

「……はい」

とまどいながらもモコを見る。

飛んでくれるだろうか。

理央は、風に向かつて立った。

「モコ、行くよ」

笛をくわえる。

がんばれ、モコ。

モコに念を送って、笛を吹く。

「ピッ」

モコは飛び立った。

行けっ、モコ。

理央は両手をにぎりしめる。けれどやはりモコの体は思うようにはあがらなかった。低いところを小さくひとまわりして、近くにあった倉庫の屋根に止まってしまった。

「モコ、がんばれ」

理央は声をはりあげたが、もう役目は終えたとばかりにじつと羽を閉^とじている。しかたなく理央は笛を吹いて、腕に戻した。

「じつはモコ、このごろあんまり飛ばないんです」

戻ってきたモコを見ながら、理央はため息をつく。

「どのくらいの頻度^{ひんど}で飛ばしとるの?」

「週に二回」

答えると、平橋さんは少し首をかしげた。

「タカによつてちがうかもしれないけど、それはちよつときついかもしれないねえ」

「でも、モコは訓練が遅れたし、がんばらんといいけんから」

「気持ちわかるけど」

平橋さんは、前置きをしてこう言った。

「理央ちゃん、少しあせつとるかもしれないね」

康太にも同じことを言われたばかりで理央は苦笑いをした。

「鷹匠の条件つて知つとる？」

「いいえ」

「愛、知、威。前に読んだ本に書いてあったよ」

平橋さんは地面に漢字を書いて示した。

「タカを愛し、よく知り、威厳を持つて接する。それが、大自然の理に溶けこんでいくことだつて」

「大自然の理に溶けこむ？」

「うん。かんたんに言つたら、自然の声をよくきくつてことかな。

自然は自分の思うようにはならんでしょ。おしつけたつて無理。それどころかすごく敏感だから、こちらのあせりやいらだちを感じて反発する。そうすると関係がこじれることがあるよ」

「……はい」

このところの訓練のやりづらさに、舞子とのやりとりが重なつて思い出されて、理央はくちびるをかんた。

「飼主は、動物の本能を尊重する覚悟を持ったほうがいいよ。コントロールする技術はそのあといくらでもつくから、ま

ずは広い心を持つこと」

「広い心……」

ひりりと痛むような言葉だつた。

実際、なかなか思うように飛ばないモコがくやしかった。何度か見せてもらった花ちゃんとは大ちがいはまだしも、カラスやハトにも負けている。タカなのにとじりじりした。だから、一生懸命に訓練した。

けれど自分が躍起になればなるほど、モコ 능력は後退していく。どうしていいのか、わからなくなっていた。モコにはモコのペースがあつたのに、自分の気持ちしわからなくなっていた。

モコ、ごめんね。

理央は腕のモコに心のなかであやまつた。ちよこんと腕に乗っているモコが、かわいらしくて、鼻の奥がつんと痛くなつた。

(まはら三桃『鷹のように帆をあげて』問題のため一部改編)

〔注〕

*花太郎…平橋さんが飼っているタカの名前。

*モビング…急降下^{こうか}したり、不規則に飛んだりして、外敵を

おどしつけるようにする飛び方。

*ヒヨコ…タカのえさとして与^{あた}えている。

*康太…理央のおさななじみ。

*舞子とのやりとり…同級生の舞子と、モコとの接し方について口を出されて気まづくなったこと。

問1

①「すごい」^①とありますが、「すごい」と理央が言った理由を説明した次の一文の

□にあてはまる最も

適切な言葉を本文から十字以上十五字以内で抜き出して、解答らんに合うように書きなさい。

花太郎のカラスを追う様子から、□を見出したから。

問2

②まるで大海原を進むような、花太郎とありますが、

花太郎の飛翔は「大海原を進むような」とたとえられています。同じように、モコの飛翔はどのようにたとえられていますか。本文から五字以上八字以内で抜き出して書きなさい。

問3

③まずは広い心を持つこととありますが、平橋さんは、モコに対してどのように接することがよいと考えていますか。解答らんに合うように書きなさい。

問4

少しあせつとるかもしれんねとありますが、これまでにあなたが、あせる気持ちをおさえて着実に物事を進めた体験は何ですか。あなた自身の体験を次の条件にしたがって具体的に書きなさい。

条件1 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

条件2 文章は、六十字以上七十字以内で書きなさい。

、や。や「なども一字と数えます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(＊印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

人間にとつてもっとも大切な自由とは何でしょうか。私は、それは働くことの自由だと考えています。なぜなら人間が生きていく意味は、自分や自分の仲間たちと一緒に、何らかの作品をつくりだしていくことのなかにあるからです。人はその一生をとおして、さまざまな物を生みだし、仲間と一緒に社会という作品をつくっていくのです。自分のつくりだした作品をみながら、生きてきたことの意味を発見する、それが人間のもっとも重要な営みなのだと思います。そうしてこの作品をつくりだすための努力、それが働くということなのです。

私は山女や岩魚を釣るために、ときどき山里を旅行することがあります。＊うっそうと茂った森のなかを、よく一人で歩きます。山の動物たちもそうですが、何百年もの年輪を経た大木に出会うと、私はいつでも友人と話をしているような気がするのです。

ある村に住むおじいさんは、昔から山の木を育てていました。そのおじいさんは言います。樹齢五十年で切った木でつくった家は五十年しかもたない。百年の木を使えば百年もつし、二百

年の木なら二百年もつ家をつくることができる。だから本当によい家をつくるためには、何百年もの間、山の木を育てなければいけない。

そのおじいさんはそう言いながら、山に木を植え、下枝や下草を刈り、毎日山を歩いて木の生長をながめているのです。それがこのおじいさんの一生をかけた労働でした。その労働をとおして、おじいさんはいろいろなことを教わってきました。自然のもつ力や美しさや、動物たちの世界や生物の一員である人間の役割や。

① このおじいさんが植えた木は、彼が^{かれ}生きている間に切られることはないのです。彼は樹齢三百年ぐらいの大木を育てようとしているからです。自分が死んだ後で森という作品が残っている、彼はそこに自分の労働のロマンを＊みているのです。

労働とは、そんなふうに自分の作品をつくり、またそのことによつて自分もいろいろなことを教えられていく過程なのでしょう。労働とは人間であることの証明なのです。もし働くことの自由がなければ、私たちには作品をつくりだす自由も、人間として生きたことを証明する自由もなくなってしまうでしょう。

だが現代とは、この働くことの自由が次第に失われていく時

代なのではないかと思ひます。ですから、これから私は、哲学^{*てつがく}の立場から労働について考えていきたいと思ひます。

いまでは日本の大多数の人々は平野に住んでゐるので、昔からそうだったのではないかという氣がするのですが、どうやら昔の人々はむしろ山地のほうに住んでゐたらしいのです。

それによると、稲作^{いんさく}が入ってくる前の日本人たちは、たいてい、山のふもとのあたりに住んでいて、木の実を拾つたり、場所によつてはヤマイモのような根菜類やアワ、ヒエなどの雑穀^{ざつこく}類を栽培^{さいばい}したりしながら暮^くらしてゐたらしいのです。その頃の日本の平地には、ツバキやシイのように冬でも葉を落とさない照葉樹の大木がうつそうと茂つていて、地面は光が当たらずジメジメしてゐてヒルなどの多い、まるで密林^{みつりん}のようで、全く人間の生活には適さないところだったらしいのです。

だから人間は、ナラやブナのような落葉樹の多い山のふもとに多く住んでゐました。そのうち稲作が伝わつてきて水田をつくるようになる、人々は照葉樹林を切り倒^{たお}して少しずつ下りながら平地へと進出してきたのです。水田をはじめは山の清水を利用して溜池^{ためいけ}をつくりながら、比較的高地^{ひかくてき}につくつていたようです。奈良地方が昔の日本の中心だったのは、ああいう盆地^{ぼんち}のほうが当時の稲作には適してゐたからでしょう。

ところで、昔はどこにでもあつたはずの照葉樹林も、いまでは神社の裏山^{うらやま}などにほんの少し残るだけになつてしまいました。平野は完全に切り拓^{ひら}かれ、都市と農村が広がつてゐます。とするといまの日本の景色は、人間によつてつくり変えられた景色だということになります。

この自然の大規模な改造^{だいきぼ}、それは人間の労働の蓄積^{ちくせき}によつてもたらされたことに、私たちは容易に氣付くでしょう。田畑をつくり木を切り倒し、道をつけ家を建ててゐたさまざまな労働、それらが日本の景色をすっかり変えてしまつたのです。

人間の労働についての第一^{*}の定義、それは「労働とは自然を加工することだ」と私は考えてゐます。つまり自然を加工して人間の作品に変えていくことです。

たとえば鉄鉱石は自然のものです。人間は労働によつて鉄鉱石を加工し、鉄を生み出します。原油からガソリンや重油をつくりだし、さらにプラスチックや化学繊維^{せんい}を生み出します。労働の第一の定義とは、そうやつて次々に自然を加工していくことなのです。だからこの二千年ぐらいの間に、日本の人々は労働を積み重ねながら自然を加工しつづけ、ついに日本の景色までをすっかりつくり変えてしまつたのです。

歴史とは労働を基礎^{きそ}にしてつくられてきたと考えてもよいで

しよう。人間は労働によって自然を加工し、作品をつくりだし、そうやって歴史に参加してきたのです。とすると労働こそ、人間の最大の喜びであり楽しみでなければならぬはずなのです。しかし現在の人間の労働は、そんなに楽しいものでも喜びでもなくなっていました。どうしてそうなってしまったのかを考えるためにも、私たちはもう少し、哲学にとって労働とは何かについて考えていくことにしましょう。

労働についての第一の定義、それは自然を加工することでした。しかしそれだけで労働の定義は終わるわけではありません。たとえば河原には無数の石が落ちていてでしょう。しかし、もし石に興味をもっていなければ、そこに石があることさえ気付かずに、私たちは歩いていってしまうかもしれません。

だが、いま何らかの労働に使う目的をもって、それにそつた石をさが探していたとしましょう。木の実をつぶすための石、穴をほ掘るための石、そういうふう目的をもって石を探せば、私たちは石の性質のちが違いを考えるようになるでしょう。仮に適した石がなければ、今度は自分で石を割ったり磨みがいたりしながら、石を加工しはじめるかもしれません。そうすると石の加工方法も工夫くふうするようになるでしょう。そういうことを繰り返かえしながら、私たちはきつと、石とは何かということを知っていくので

す。

労働についての第一の定義は自然を加工することでした。だが、ここで、第二の定義が必要になったようです。それは〈労働によって人間は自然の性質や本質を認識にんしきしていく〉ということです。つまり労働によって、人間は自然を加工し、逆に自然は人間に自然の性質を教えていくのです。自然を加工することを哲学では「自然を人間化する」といいますが、そのとき②人間グ人の自然化も一緒に進行していくのです。

人間は労働によっていままで知らなかったことを発見し、自分の意識や能力を高めていくのです。ですから労働をするようになったとき、ほかの動物とは違う人間が誕生たんじょうし、そのときの労働の歴史が人間を変えつづけてきたといってもよい、と私は思います。

私はしばしば釣りに出かけては、山村に滞在たいざいしています。ところが山奥やまおくの村に行つてそこに住む人たちと話をしてみると、彼らが実に多くの知識をもっていることに驚おどろかされるのです。はじめはそのことが不思議でなりませんでした。が、しばらくすると理由がわかってきました。

彼らは実に多くの労働をしていたのです。木を育て木を切り倒し、田畑を耕し、昔は魚も釣れば猟りようもしていました。それ

だけではなく、必要なときは都市に働きに行き、また村の祭りを主催したり、子供たちのために学校をつくったりするのも、村では立派な労働でした。

会社に勤めることが唯一の労働になっている都市に住む私たちは、次第に会社のなかのことしかわからなくなってしまうのです。なぜなら〈労働〉によって知ることができるのは、そのことだけからです。

ところが、山村の人たちは昔からいろいろな労働をしながら生きてきました。そうしてそのことが、彼らの豊富な知識をつくりだしていったのです。

現在では、収入を得るために働くことが労働だというような社会になってしまいましたが、人間の労働とは本当は、もっと深くて広いものなのです。いま私はできるだけ深くて広い労働のなかに身を置いて生きていきたいと思っています。なぜなら労働とは自分をつくることでもあり、自然を知ることでもあるからです。

(内山節 『内山節著作集 4 哲学の冒険』 問題のため一部
改編)

〔注〕

*うつそう…光が通らないほど樹木が生い茂っている様子のこと。

*ロマン…ここでは、強いあこがれ、のこと。

*哲学…世界・人生・事物のあり方や根本原理を理性によって探求する学問のこと。

*定義…言葉の意味を正確に限定すること。

問1

① このおじいさんが植えた木は、彼が^{かれ}生きている間に切られることはないのです。とありますが、おじいさんは、なぜ木を育てているのですか。おじいさん自身が考える木を育て続ける理由を考え解答らんに合うように書きなさい。

問2

② [〃]人間の自然化[〃] とありますが、それはどのようなことですか。本文中の言葉を五字以上八字以内で抜き出して、解答らんに合うように書きなさい。

問3

筆者は都市に住む人々と山村に住む人々の違いを述べています。始めに、このことについて要約し、次に、それをふまえてあなたはどのような「労働」がしたいか、を書きなさい。その際、次の条件にしたがいなさい。

条件1 段落構成^{だんらく}については、次の①から②にしたがうこと。

① 第一段落には、都市の人々の「労働」について、山村の人々の「労働」と比較^{ひかく}しながら要約しなさい。

② 第二段落には、第一段落をふまえ、あなたはどのような「労働」をしたいか、具体的な「労働」の内容を、理由もふくめて書きなさい。

条件2 その他については、次の①から③の条件にしたがうこと。

① 解答は原稿用紙^{げんこう}の正しい使い方で書き、書き出しは1マス空けて書き始めなさい。

② また、言葉を正しく使い、文章は二百八十字以上三百四十字以内で書きなさい。

③ 、や。や「なども一字と数え、改行などで空いたマスも字数に数えます。

